

遺骨を放置した靖國合祀というカラクリ

2025年5月2日
弁護士 内田 雅敏

靖國合祀は戦死者の魂の「復員」か

日本国が敗戦に際して受諾したポツダム宣言第9項は「日本国軍隊ハ完全ニ武装解除サレタ後各自ノ家庭ニ復帰シ、平和的、且ツ生産的生活ヲ営ム機会ヲ得シメラレルヘシ」と兵士の帰還、即ち「復員」を謳っています。

広辞苑で「復員」の語を引くと「戦時の体制にある軍隊を平時の体制に復し、兵員の召集を解くこと、また、召集を解かれた兵士が帰郷すること」とあります。国家には戦争の終結に際し、動員した兵士を復員させる義務が発生します。復員の対象となるのは生存兵士だけでなく、戦死者も当然含まれます。具体的には遺骨の送還です。

「仰々しく、恭しく引き取った父の白木の箱の中身は石ころ一つでした。『何処かの山の石か道端に転がっていた石かねえ』、母はよく言っていました。死というものがその程度の軽々しいものであったのだと思います。(中略)満州で散った娘婿と沖縄で散った長男の写真をいつも胸ポケットに入れていた寡黙な祖父は恨み言も言わず、胸中どんなだっただろうと、今思います」。父を満州で、叔父を沖縄で亡くした筆者の同級生(1945年敗戦の年生まれ)からの手紙の一節です。

敗戦後、戦死者の遺族の多くが、名前の書かれた紙片だけが、あるいは石ころだけが入った「白木の箱」を受け取られました【注】。「遺骨なき七十九年の空白よ 戦死せし義父の墓じまいする」と、2024年9月22日の朝日歌壇にありました。

アジア・太平洋戦争における日本人の死者約310万人中、海外で亡くなった将兵約240万人、そのうち遺骨が還って来たものが100余万人、未だ100～140万人の遺骨がニューギニア、フィ

リッピンなどの南海の島々、ビルマ、タイ、そして中国大陆に放置されています。

遺族として長年遺骨収集に携わって来たI氏は、国の遺骨収集業務の遅れを非難したところ、同席していた佐官クラスの元陸軍軍人から「そんなに怒ることはない。皆、すでに靖國神社に帰っているよ」と言われたといいます。ここに「魂」を靖國神社にお迎えしているから遺骨は放置されていてもかまわないという「靖國合祀」のカラクリがあります。

明仁天皇夫妻(当時)のペルリュー島への慰霊の旅の報に接し、〈靖國はペルリュー島より遠いのか〉と歯がみし、「あんな処へ行ったら、骨はあるかもしれないが、魂はいねえよ」と悪態を吐いたのをちくられ、不敬だとして辞任させられた靖國神社の宮司もいました。「魂は俺が持っているぞと宮司言い」です。

諸外国、例えば米国では、遺骨はもちろんこと、可能な場合には遺体の本国送還までやっていることはよく知られています。日本国家は靖國合祀を隠れ蓑として、海没のような収集不可能な遺骨はともかくとして、収集可能な遺骨についても収集義務を果



たさず、放置してきました。硫黄島の滑走路下に約1万人の日本兵の遺骨が放置されていると言われてるように、戦後80年を経てなお、かつての戦地に多くの遺骨が放置されたままになっています。前述の元陸軍軍人が言うように、魂は靖國神社で預かっており、「護国の英霊」として祀っているから安心しろというわけです。

「サイパンから来た列車」

陸軍伍長として日中「戦争」に従軍、負傷し、太平洋戦争中は陸軍報道班員として南方各地に従軍した棟田博が書いた『サイパンから来た列車』（光人社NF文庫）という短編があります。

1956年「経済白書」は、<もはや、戦後ではない>と書きました。その前年55年の夏、終発列車の終わった深夜の東京駅、人気のない14番プラットフォームに、忽然と古ぼけた列車が1本入って来ました。玉砕島サイパンから到着した列車です。ラッパの音が一声鳴りわたると、降りてきたのは、穴のあいた鉄兜をかぶり、汗と泥と血でボロボロになった戎衣（軍服のこと引用者注）をまとい、軍靴もパツリと口を開けた英霊、サイパン島で玉砕した秋吉支隊の隊員達でした。彼らは、戦後10年を経た故国の様子を見聞し、サイパン島に眠る戦友達に伝えるためにやって来たのです。

各中隊毎に点呼を受け、支隊長秋吉少将の訓示を受け、各々かつての家庭や職場の現在を確認するため散って行きます。再集合は明朝4時55分に大阪発の列車が到着する直前、わずか数時間の探訪です。部下達を見送った秋吉少将は一人皇居に昭和天皇を訪れます。

「夜更けの二重橋には、太古からのような静寂がこめていた。（中略）草莽の臣秋吉善鬼は、咫尺^{しせき}において、ただひと言、陛下に言上したきことがあるのだ。

橋を渡って、少将の姿は門の彼方へずっと消えた。が、ものの2、3分も経たぬ間に、また、ずっと門から現われ出た。恐懼頓首ともいうべき急ぎ足で、橋を後戻りすると木柵を越え、橋袂の玉砂利の上に正座平伏した。

『陛下ッ！』ハラハラと、老少将の双眼から熱涙がふり落ちた。胸中は、痛恨の悲憤に、掻きむしられるかのごとくであった。天皇陛下万歳を唱えつつ水漬く屍、草むす屍と化し去った幾百万の朕が忠良の股肱の心を、果たして陛下はお汲み取りになられた上の十年前のあの大詔であったのであろうか。が、もはや、なけど悔やめど詮なきしだいである。

『陛下ッ！』ただ、そう呼んで秋吉少将は、落涙を続けた。（中略）

『陛下！ もはや、臣らはなにも申し上げませぬ。しかしながら、臣らは、明日はまた南溟の地に舞い戻らねばならぬのであります。

『陛下！』臣らも陛下の在らす地、この祖国の山河に眠りたいのであります。願わくば、大御心により臣らの遺骨を祖先墳墓の地にお移し賜るよう、一同になりかわり草莽の臣秋吉善鬼、伏して懇願を奉りまする！』と、再び左手をつき、玉砂利の上に白髪^{しは}の頭をこすりつけた。』

戦没者に対する敬意の欠如

日本国家は、戦没者に敬意を表していません。沖縄南部戦跡地の遺骨混じりの土砂を辺野古の米軍新基地地建設のための埋め立てに使用するという発想はその表れです。硫黄島に放置されている遺骨もそうです。

「……日本の独立と日本を取り巻くアジアの平和を守っていくためには悲しいことですが、外国との戦いも何度か起こったのです。明治時代には「日清戦争」、「日露戦争」、大正時代には「第1次世界大戦」、昭和になっては「満州事変」、「支那事変」そして「大東亜戦争」（第2次世界大戦）が起こりました。（中略）戦争は本当に悲しい出来事ですが、日本の独立をしっかりと守り、平和な国として、まわりのアジアの国々と共に栄えていくためには、戦わなければならなかったのです。……」（靖國神社発行「靖國大百科」）。

靖國神社は、聖戦史観（大東亜戦争史観・植民地解放史観）によって戦死者を顕彰し、兵士の再生産を図る軍事施設・戦争神社ですが、同時に戦死者の魂の合祀という「からくり」によって、戦死者の復員、具体的には遺族への遺骨の送還という国家の「復員」

義務を事実上免除してきました。戦没者の遺骨収集を「国の責務」とした戦没者遺骨収集推進法が議員立法で成立したのは、戦後70余年を経た2016年になってからです。

【注】台湾、朝鮮半島等かつての植民地からも約45万人が日本の戦争に狩り出され、約5万人の人々が亡くなりましたが、日本政府は、彼らの遺族には死亡通知すらしていません。